

## 忘れ得ぬ人々

## ——その4 パノフスキー——

## 辻 成史

1960年前後の（そして今もなお）私の語学力ではトーマス・マンは結構難しく、大学を終えるころ、友人たちとの読書会で原文に親しんだ傑作『ヴェニスに死す』も、最後まで読み通したという記憶はない。しかし、薄いペーパーバックの原書は、1962年にプリンストン大学に留学した際も、私の旅装のどこかに入っていたような記憶がある。その後はいつの間にか最後まで、とにかく「目を通して」いた。主人公の大作家フォン・アッシェンバッハが、その死に瀕した最後の視線を、波打ち際で友人たちと争う愛人の美少年に注ぎながら遂に倒れる場面、そして、「世界はその偉大な作家の訃報をうやうやしく受け取った」という最後の行が強く心に残った。

すでに留学する以前から、マンの描くフォン・アッシェンバッハのイメージは、私の心の中で、素晴らしいゲルマン系の大知識人に育っていた。やがてはヴェネチアの海岸で、人知らぬ情念に駆られつつ世を去ることになるフォン・アッシェンバッハも、その「夕暮れの長い散歩」に出、顔落の幻に憑かれるまでは、誰よりも厳しくおのれを律し、自らに鞭打ってヨーロッパ文化の伝統を守った作家であった。そういうゲルマン系の大作家のイメージは、（フォン・アッシェンバッハの特異な容貌について、作中かなり詳しい記述があるにもかかわらず）私の中では勝手に、典型的なゲルマン系の、克己心に富んだ理性的な人物にと育っていた。そこには、小学校時代に日本を訪問したヒットラー・ユージェント（青年隊）の凛々しい姿の記憶が重なり合っていたのかもしれない。

私が初めてE・パノフスキーの著作に接したのは、ちょうど日本を発つ二、三年前のことであった。先の回でも触れたが、そういうことには何かと勘の良かった私の父が、ある日丸善で、ペーパーバックの *Meaning in the Visual Arts*<sup>1</sup> のペーパーバック（1955年版）を買ってきて、「成史、これ面白そうだから読んでみる」といってくれたのが最初である。読み始めた私は、たちまちパノフスキーの虜になった。その頃の私の英語力では、結構難しいところもあったが、それでもその（当時の日本では想像もつかない）豊富な文献、作品資料、そしてそこから見事に結論を紡ぎ出してくるその技は、まるで素晴らしい魔法使いの芸を見るように、わたしを驚かせ、讃嘆させた。例の、図像解釈学に関する三段階の論理にも唸らされたが、論文としては、やはり有名になった「我もまたアルカディアにありき」に魅了された。

<sup>1</sup> （以下編者註）邦訳『視覚芸術の意味』（中森義宗・内藤秀雄・清水忠訳）岩崎美術社、1971年。

年寄り風を吹かせるわけではないが、若い読者のために言い添えるなら、1950年代末の日本の美術史学界では、パノフスキーの貢献は、表立ってはまだほとんど問題とされていなかった。パノフスキーのみならず、図像学という領域さえも、仏像の儀軌の研究はあったものの、西洋美術で問題となることは稀であった。これも前回は触れたと思うが、私が三浦アンナ先生の指導の下でキリスト教図像学の研究を志した時には、先輩方から、「君、よくそんな退屈な仕事をしませぬ」と揶揄されたことを覚えている。

後になって分かったことであるが、やがて日本にイコノロジーやキリスト教図像学を積極的に紹介されることになる中森義宗氏や海津忠雄氏、あるいは多少視点は異なるものの、図像学的にも顕著な貢献をされた矢崎美盛氏などは、既にイコノロジーの検討に着手されていたと思うが、1950年代後半では、それら先輩のご活躍ぶりは、まだ私のような若輩の耳には届いていなかった。総じて戦前、パノフスキーについての日本の研究者の言及はごく僅かであり、その点では幼稚なものであるが、留学以前に発表した一、二の拙論<sup>2</sup>は、戦後の図像学研究文献の始めの方に入っている。

*Meaning* に続いて、留学以前に私が接することとなったパノフスキーの著作は、*Renaissance and Renascences in Western Art* (1960)<sup>3</sup> であった。(これより以前に出版されていた *Early Netherlandish Painting* (1953)<sup>4</sup> が当時日本でほとんど知られていなかったのは今思えば不思議である。そのころ日本では、まだ北方ルネサンス美術の研究者はいなかったのであろうか?) *Renaissance and Renascences* のハードバックは、当時の日本で学生がお小遣いで買うには少々高すぎた。私はそれを、西洋美術館の書庫で見つけ、無理にお願いして貸していただいたのである。今思うに、この書は1953年に留学から帰国し、西洋美術館の学芸員に就任された高階秀爾氏の希望で館が購入されたのかもしれない。

後に中森氏の邦訳が『ルネサンスの春』という表題で出版されることになるこの書も、瞬く間に私を魅了した。間もなくプリンストンに行くことになる慌ただしい時期ではあったが、大急ぎであちこちと飛ばし読みをした。とくに、カロリング朝以降の西欧中世における古代復興に関する箇所は何度か目を通した。先の *Meaning* 以上にこの書には、著者の古典古代に関する驚くべき深い造詣に溢れていた。その点に関しては、書の本文よりは豊富な注が、私の貧しい古代に関する興味をいやがうえにもかき立てた。ただこれも今思うと不思議だが、これだけパノフスキーに心酔しながら、やがて行くプリンストンで彼に学びたい、という気持ちは起こらなかった。留学の目的はあくまで K・ヴァイツマンについてビザンティン写本挿絵を研究するためであり、古典古代そのものの研究は、内心の関心事にとどまっていた。そして、まだ見ぬパノフスキーの容姿は、これも私が勝手に心に描いたフォン・アッシェンバッハのような、凜としたゲルマン系

<sup>2</sup> 「キリスト教図像学研究史の概略」『キリスト教学』3 (1962) 参照。

<sup>3</sup> 邦訳『ルネサンスの春』(中森義宗・清水忠訳)新思索社、2006年(思索社、1984年)。

<sup>4</sup> 邦訳『初期ネーデルラント絵画：その起源と性格』(勝國興・蜷川順子訳)中央公論美術出版、2001年。

の偉丈夫に育っていった。

私が到着した 1962 年 9 月のプリンストンの町とキャンパスは、まだ戦後の荒廃から十分に脱したとは言えなかった日本から来た若者には、まるで夢のように美しく、整備された研究・教育設備も、これまた夢に描いたようであった。(付言するなら、プリンストンの町や大学も、その頃は良い意味で戦前の雰囲気をよく残していた。それが大幅に変わったのはアメリカのヴェトナム戦参戦、そして町の内外に IT 企業の研究所が雨後の筍のように建ち始めてからのことである。)しかし到着後間もなく、学期がようやく始まった時、アメリカと世界は、戦後史最大の危機に面していた。それはキューバ危機である。キューバの社会主義革命が成功し、そこに配置すべく、弾道ミサイルを積んだソ連の船団が刻一刻近付いていた。アメリカは臨戦態勢を取って海上封鎖に入り、ラジオやテレビは船団の位置を刻々と伝え、迎え撃つアメリカの艦隊との衝突の瞬間を、全世界が固唾をのんで見守ることとなった。

そんなときのある夕陽の美しい夕刻、院生の勉強部屋で四、五人の同僚と机を並べて勉強していた時、何の音だったのだろうか、突然強い爆発音がした。瞬間、同僚の一人が飛び上がり、「Goodbye, everybody! This is the end of the world!」と叫んだのが、冗談とも真面目ともつかず、皆で苦笑したことを覚えている。しかし事態はまさにその通りであった。後に、当時の国防長官だったマクナマラの回想として、多分同じ頃の夕日の美しい夕方、オフィスの窓から夕日に映えるポトマック河を見、この河を見るのも今日が見納めかと思った、と記されているのを読んだ。世界はまさに第三次世界大戦、それも全面核戦争の危機に瀕していたのである。

その頃、美術史・考古学の図書館兼研究室であったマークアンド・ライブラリーは、戦前のままのロマネスク様式のお古めかしい建物であった。到着して暫く後、授業開始までまだ数日という頃、ほとんど他に人影のない閲覧室で、少し猫背の背をさらに丸め、熱心に資料を読みノートを取っている老人がいた。窓から差し込む夕日の陰の中のその人は、齢の頃は六十代半ぐらいであったろうか。背は低く、少し薄くなった短髪は丸く、いわゆる才槌頭であった。顔の色はどちらかといえば褐色で、太い黒い眉の下、黒縁の眼鏡の奥のぎょろ目だけが、異様に生き生きと輝いていた。その人が席を立った折に机上を見ると、大体がティツィアーノ関係の図書で、ルネッサンス絵画を研究しているということは解った。そこであるとき、同僚に、あの老人は誰かと尋ねたところ、「お前、知らないのか、あれがパノフスキーだ」という返事であった。

これには驚いた。なぜなら、それは私が心の中で抱いてきたヨーロッパの大知識人とは、似ても似付かぬ容貌だったからである。そのころ私は、まだ北欧系の、いわゆる(ナチズムが喧伝した)アーリア人種の人達の容貌と、ユダヤ人を含めたセム系の人達の容貌との違いがわかっていた。西欧の古典・中世文化にあれほど精通した人物が、その外見において、私が心中に描いていた理想のヨーロッパ人とまるでかけ離れていたことが信じられなかったのである。

多少角度が変わるが、プリンストンに到着したその日から、もう一つ私のそれまでの西欧文化

観と現実の懸隔に驚かされたことがある。典型的な東部の豊かな小邑であるプリンストンには、街のあちこちに様々な宗派の教会が立っていた。大学と隣接（というか同じ敷地）には神学校があり、その小さなライブラリーは私の精神的休息の場であった。初回に触れたように、立教大学時代の恩師のローズ先生の先輩であり、新約聖書学の泰斗であったメッツガー先生と出会ったのもこのライブラリーであった。しかし、私が驚かされたのは、確かこの神学校のチャペルを始め、多くの教会堂が、新古典様式で建てられていたことである。

アメリカの多くの大学同様、プリンストン大学のチャペルは立派なゴシック様式であった。その創建には、大学の中世研究者が大いに預かっていたとも聞いた。西欧文化についてごく浅はかな知識しか持ち合わせていなかった私にも、この会堂の様式は大いに傾けた。しかし、その未熟さの故に、私には基督教の会堂が新古典様式で建てられていることがどうにも理解できなかった。当時の私にとって、新古典様式は理性と啓蒙の象徴であった。もちろんその時点では、私はアルベルティの聖アンドレアもテンピオ・マラテステイアーノも知らなかった。つまり、近世以来ヨーロッパが自らのキリスト教的土壌の上に古典様式の復活を図ったということがまだ全く理解出来ていなかったのである。